

### 改めてアナログ・ディスクの再生について

その意義はあるのか？と聞かれたら、それは「ある」と言い切れます。

当社のメインシステムの場合、音楽 CD 再生のシステムと今回導入したアナログ・ディスク再生システムの差は本当に微妙です。しかし、やはり違いがあります。

ただし、音楽 CD の盤質（録音の仕方）の違いに比べると、アナログ・ディスクの盤質の違いははるかに大きく、音質が違うどころか、当社がサンプル音源として Amazon から購入した US 盤（全て新品）には最初から傷があるものが結構あります。

流石にカートリッジの針先で付けられないような傷がある盤は交換してもらいましたが、こうしたことは音楽 CD では、例え海外盤でもあまり経験したことがありません。

アナログ・ディスク再生をおやりになる場合、ディスクの盤質については当り外れが多いことをまず念頭に置かれた方がいいと思います。

次に、ディスクの表面は毎回クリーナーで清掃された方が無難です。清掃というより磨くというイメージかもしれません。新品のディスクの表面も結構「荒れて」いる場合が多いからです。

全く余談ですが、中古ディスクの穴の近くにスピンドルに当たったと思われる跡が何箇所もある場合があります。しかし盤質には問題が無かったりします。

こういう場合、大事にされたディスクだなとホッとします。

現在、当社が保有するサンプル・ディスクについていえば、マイルスの“MILES DAVIS ALL STARS”の A 面などがアナログ・ディスクの良さを聴かせてくれます。

この盤は別に(180g というような)重量盤ではありませんが、たまたま運良く傷もなく録音もよかったようです。

こうした盤を聴いていますと、音楽の細かいニュアンスが分りますので、ついつい音量を上げてしまいます。

そうすると、スピーカーにもよりますが、当社のメインシステムの DS-10000 の場合はウーファーもよく鳴り、全体として相乗効果が働いて愉しくなります。

ある程度音量を上げるとなると（当社としては聴感補正無しで 90dB を一応の基準としていますが）、やはり部屋の遮音もした方がよいと思います。

ちなみに、当社の標準仕様では 45dB の遮音性能を目指していますので、外部へ出る音は  $90\text{dB} - 45\text{dB} = 45\text{dB}$  となります。これならアナログ・ディスク再生を十分楽しめるのではないかと思います。